

人口転換、生活史戦略と舞踊

齋藤尚大（横浜カメラリアホスピタル）

舞踊が人類の変化に鋭敏なら、近代舞踊は舞踊進化史の一段階を画するのではないか。本論では、近代の人口転換と生活史戦略の変化から近代舞踊の特徴を考察する。ここで近代舞踊とは、日本の舞踊に限らず、20世紀初頭に米欧で始まった舞踊の潮流とそれに影響を受けた舞踊を大まかに指す。

近代舞踊の初期の担い手が誕生した19世紀中盤～後半の西欧・北米では、出生率と死亡率の低下に特徴付けられる人口転換が起き、それに伴い生活史戦略はより年齢的に遅い生物学的再生産と子孫の質への投資の増加へと転換した。遅い生活史戦略と関連し、女性の余命が男性より長くなり、また子孫への資本の継承や、親族網の断片化と高密度な交配市場の形成といった、交配や成長にまつわる変化を伴ったことが指摘されている。

この変化と関連すると思われる近代舞踊の特徴を挙げる。1)女性の遺伝的能力の開花と生殖養育負担からの解放は、イサドラ・ダンカンを始めとする女性舞踊家による近代舞踊の創始につながった。2)親族網の断片化は、輸送機関のモダニゼーションや映像メディアの発達に伴い、舞踊の水平伝達の増加、すなわち国際化をもたらした。これらの変化に派生して、舞踊する身体の増加による振付家の台頭や、また人口転換未達成の地域の舞踊のモダニズムや伝統舞踊の再興、さらに民族舞踊と近代舞踊の相互作用が生じた。

以上の特徴を、ヨセフ・ガーフィンケルがまとめた舞踊の累層的進化段階に照らし合わせると、性的舞踊/共同体の舞踊・通過儀礼(10万年前～)/憑依舞踊(4万年前～)/農耕と関連する暦年儀式(1万年前～)/都市化と関連するアクロバット技術と振付の発展による、他者の享楽のための職業舞踊(5千年前～)という諸段階の舞踊が時に応じて様々な程度に活性化され、また各地の土着

的な身振り・構えや傑出した個人の技術が混淆し、民族的言語的特徴から推測される個人の出自を曖昧にする、より多くの他者の身体性を取り込んだ踊りの遍在化と捉えられる面が一方である。他方で、様々な舞踊の混淆が進展したにも関わらず、上述の諸段階とは異質な、自己志向的で身体や身振りをあえて統御しない種々の個別的舞踊への分散も生じているように思われる。舞踊の個別性は近代舞踊の特徴であり、自己に向けた舞踊として、遅い生活史戦略の限界である自己投資への収斂・生殖への不関焉という事態を鋭敏に捉えていたのではないか。

このような変化を実証的に検討できるようにするため、最後にエージェント・ベスト・モデルの応用可能性に言及する。

1)遅い生活史戦略への転換がもたらす寿命の伸長や個体の資本増加が与える影響について考察するには、アルベルト・アチェルビによる社会学習規則自体の社会学習のモデルが参考になる。それによれば、寿命の伸長は学習の保守性に、世代間で伝達される文化的特性の数的増加は開放性につながる傾向にある。このモデルを援用するにあたっては、舞踊におけるそれぞれの因子の影響について検討を要する。

2)複数の文化集団の混淆が進展する中でかえって個別の小集団への分散が生じる様相について、ロバート・アクセルロッドは、局地的に個人が他者とできるだけ同化(assimilation)しようとする、条件によっては大局的には文化的特性の地域差が生じうることを示している。さらに、アンドレアス・フレッヒェは、影響源とは異なる方向を取る分化(differentiation)をエージェント間に影響関係に加えたモデルを用いて、諸傾向がスペクトラムを形成し滑らかに分布しながらも、文化的逸脱者が生じうることを示している。これらのモデルに依拠するならば、舞踊における同化・分化の行動的過程の程度を検討する必要がある。